

1987-7

No. 226

【表紙】

彫漆布袋葵手箱

音丸 耕堂

昭和54年制作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

# もくじ

## 特集：企業と文化活動

企業と文化活動	堤 清二	4
企業と文化 —サントリーの場合	佐治 敬三	6
企業と文化活動 —ポラ化粧品の場合	大西 武司	8
名鉄の文化事業について	名鉄文化事業部	10

—ぶんか プンカ—		
西欧芸術見聞録	横井 茂	12
在研の思い出	西沢 敬一	14

—都道府県のページ—		
我が県の文化行政④		
創る文化活動	鹿児島県	15
『21世紀をひらく人づくりと文化づくり』をめざして		
特色ある文化活動①		
市民文化会館を中心に	天童市市民文化会館	18

—文化行政質問箱—		
著作権		4
文化財保護		1
		20
		21

—文化庁だより—		
文化庁ニュース		
・昭和62年度(第42回)芸術祭の開催計画決まる		23
・昭和62年度文化庁派遣芸術家在外研修員を決定		25
・文化庁 舞台芸術創作作品募集		26
・文化振興会議の開催について		26
展覧会紹介		
寄贈の名品/矢田丘陵の寺でら		27
カンティンスキー展/木工芸		28

・都道府県月間行事予定 7月	29
・文化庁行事報告及び予定	30
・国立劇場ニュース	31

に、私はなぜか涙が止まらなかつた。  
私が研修に行ったのは世界が激動した年で、ニューヨークではドクター・キング殺害事件があり、パリでは五月革命の騒乱に出会い、又ウィーンではロバート・ケネディーの暗殺を知った。そしてバイロイトではソ連等のチエコ武力介入の報を聞いた。間もなくNATO軍の重戦車が街を横切つて国境に向かうのを目撃、強い緊張を味わつた。チエコとの国境まで六十キロの町での音楽祭であつた。  
海外に出たのは三十八歳の時で、バレエの演出家として一人前であるとの自覚を持つていたが、外国でのさまざまな舞台を見、稽古に立ち会つたこと、又、これら大きな世界的事件の続発には、やはり有形無形の影響を受けていたのである。  
帰国後、私は原爆、沖縄戦、戦争犯罪等を創作の題材とし、又「沈黙」、「白炎」など日本人をテーマとする創作バレエを相次いで発表した。外国に行き真に日本人は日本人ではないことを知り、ナショナルリリーの無いインターナショナルは存在せず、無国籍の芸術は世界に無いことを知つたからであつた。  
五十二年度派遣のフレスコ画家の絹谷幸二さんは「私は研修に行つて変な意味でなく愛国者に成つて帰つて来ました」と語つていたが、日本では得がたい色々の体験が彼をしてかく語らせたのであるが、全く同感である。かつてアダベストで観たオペラ「青髭公の城」の演奏の素晴らしさを、同期の若杉さん

は「おらが国の音楽なのだ」と解説してくれた。そして、ローマ国立劇場の舞踊監督ミロシュ氏は「白鳥の湖はあくまで白人の為に創られた作品である」と語つていた。私達黄色人種の日本人は、将来劇場芸術として何をもつて世界に誇れる事が出来るのであろう。  
三  
第二国立劇場の設立もまじかになつた今、日本人としてこれらの問題点は真剣に考えるべき時である。劇場芸術家達の悲願であつた第二国立劇場では、欧米の古典作品の上演が多くなるとおもふ。古典作品の上演は、技術の向上と海外に対する位置づけの為、必要かつ欠くべからざる事であるが、しかしその後、はたして日本として海外に誇れる劇場芸術が誕生するであろうか、私は強い懸念を覚える。やはり欧米の劇場芸術の発祥のごとく、古典作品の上演と共に日本人の創作作品も上演すべきである。  
私の父、第十七代宗家宝生九郎重英は古典の伝承は「指一本変えてもいけない」と語り又「しかしバレエの題材として取り上げるのは自由である」とかつて語つていた。申す迄もなく日本には能楽、狂言、文楽等世界に誇れる劇場芸術が多くある。これら日本の芸術遺産を基に、新しいバレエ、オペラを創造することもその一方法である。しかし、これら創作作品の上演の為には、かなりの時と智慧が必要である。今から長期的展望にたち、計

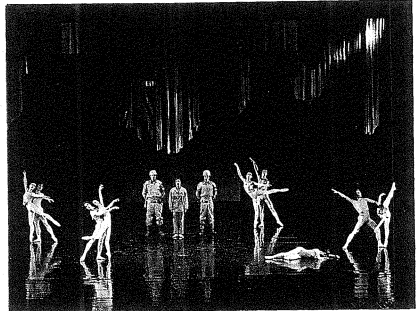
の奥谷博さんが指名されていた。  
派遣の期間はだいたい一年。それぞれ専門分野に沿つて受入れ先を探し、しっかりと勉強してきてほしいとのことだつた。文部省の方の注文はそれぐらいだつたので、若杉さんと二人で「四か国ぐらいは回つていいのかもしれないね」などと勝手な想像をめぐらしていたが、私の訪ねた先は前述の通り、四か国にとどまらなかつた。もつとも在研制度の規約ができたのが私達の次の年度からであり、文化庁は現在の文化庁に発展していった。  
二  
私の旅は、一つの町で腰を据えじつくりと研修するのではなく、広く世界のバレエのレベルを知ることになつた。その点研修というよりは（見修）といつた方が正確かもしれないが、あの十一月の海外生活は、今考えてもかけがえない機会であつた。  
研修に於ける一番強い感銘は、ウィーンでの今は亡き指揮者オットー・クレンペラーの練習を若杉さんとともに見学するという幸運に恵まれた時である。相手はウィーンフィル、曲目はマーラーの交響曲九番。クレンペラーはすでに八十歳を超えており、椅子に座つたまま手もほとんど動かさなかつた。又、口にする言葉もごく短いものばかりだが、彼の信念が楽団員一人一人にひしひしと伝わつていく様が見事だつた。そして翌日の演奏会の素晴らしい音楽の洪水と伝統の持つ強い説得力

昨年海外旅行者は五百万人を超えたといふ。外国に出かけることはそう難しいことではなくなつたといへ、この数字にはやはり驚きを覚える。  
昭和四十二年に、文部省文化局（現文化庁）派遣の芸術家在外研修員制度の第一期生として、私が欧米に旅立つた際は、外国に行くのはまだ珍しく、日本から外貨の持ち出し枠も通常は五百ドル、そして一ドルは三百六十円であつた。その年の海外旅行者は二十七万弱、今日の二十分の一である。外国はまだまだ遠くて高いところだつたのである。  
それだけに、外国に行きませんが、と声をかけていただいた時は、永年抱いていた夢が一気に花開いた感じで、あの国へも、あの都市のこの劇場へも、行きたい土地の名が次から次と頭の中で駆けめぐつた。実際初めての海外の旅とはいへ、実に二十三の国々をバレエとオペラを追いかけ歩き回つたのである。ニューヨーク、レニングラード、ウィーン、パリ等々。実に百回数十回劇場に通つた事になる。夏冬の衣類など二十キロの荷物を両手に下げ今考えれば実に大変な旅であつた。  
文部省に以前から在研制度の構想はあつたらしいが、私達昭和四十二年第一期生への申し渡しは「一週間以内に研修計画を提出してほしい」というほど急な話だつた。他に指揮者の若杉弘さん、演出の増見利清さん、洋画

# 西欧芸術見聞録



## 横井 茂



(写真提供=STAFF TES CO.,LTD.)

画をたてるべきであらう。  
国の派遣という肩書があつたため、各地の劇場の舞台裏をつぶさに見る事が出来たとか、外国に出て初めて自分の水準を認識出来たなど、在研の意義を語る人は多い。実はこうした体験談を聞けるようになったのは、この四月、在研OB会が発足したからである。在外研修を体験した人は過去二十年に五百人を数えるものの、帰国すればそれぞれの分野に散つて、相互に交流、親睦をはかる場がなかつたのである。しかし、各人の体験はこれから行く人には実に貴重な助言になるし、芸術の各ジャンルが互いに交錯し合うクロスオーバーの時代であると同時に、国際交流がますます活発になる今日、横のつながりは不可欠であるとの機運が急速に盛り上がった結果であつた。  
今後この智慧の集団が、国民の税金を使わせていただいた芸術家個々として、将来の日本文化発展のため力を尽くして行く事こそ、文化庁芸術家在外研修員の会としての責務であると思つてゐる。  
写真 「昭和二十年夏」  
戦争犯罪に対する裁判をテーマとした一時間半の大作  
一九七八年度芸術祭優秀賞受賞作  
出演 東京バレエ・グループ  
文化庁芸術家在外研修員の会代表世話人  
東京バレエ・グループ主宰  
大阪芸術大学舞台芸術学科教授  
注 文中「在研」とは、文化庁芸術家在外研修員の略

旅行をするとき、それもその旅行が二、三日の観光旅行や出張でなく、一年の期間ともなるとその出発前に、一体何を持って行ったら良いか色々悩むものである。最近では宅配便が国内だけでなく海外にまでそのサービスエリアを拡げているので、旅行者や留学生は目的の地に着いて必要を感じてから国許に発注しても、必要な物の入手に数日を予定しておけば充分だと聞く。私の留学した十一年程前にも、もちろん航空貨物や船便はあったので物を送ればしたが、今のように「円」の有利な時代ではなく、可成り不便な時代であった。

先方での生活に一応自分の意志と力で見ずムが作れるようになるにはどうしても二、三ヶ月がかかってしまい、それまでは生活環境を整え、土地に慣れ、人に慣れ、食べ物の入手の方法と食べ方に慣れ、と毎日が緊張の連続である。滞在の期間に制限が無く、又、国費留学でない自費留学であれば先ずは生活に慣れ、徐々に研修に着手する、ということも出来るのだが、一年という期限があり、貴重な国費で留学させていただいているというところな訳にもゆかない。到着翌日に、荷を解く間もなく、私の場合は劇場へ出かけた。言葉も不自由である。劇場の受付の守衛が先ず最初の関門である。私が留学したのは、西ドイツの大都市、ニュルンベルクの市立歌劇場。市の人口数十万人のうち日本人はわず

か十数人だったはずなので、先方も私を異星人を観る様な目付きで見つめた。当方も自分の言いたい事、研修の目的ぐらいいは一応予習してあるので、相手の目も見ずに、ただ自分の暗記したことをそのまま吐き出す。彼に聞き返されたらまずいので、出来るだけ大声でひとことひとことをはっきりと言ったのでど

## 在研の思い出



西沢敬一

うやら通じた。しかし次の部屋に待っていたのは劇場総務。ここでも同じ事を繰り返したが、それもわずか数十秒であとが続かない。単純なやりとりはまだしも「在研」の制度そのものについて問われたりで右往左往。そんな時思い出したのは二通の書類。出発前に文化庁が持たせて呉れた「身分証明書」と「紹

介及び便宜供与依頼書」であった。私はこの書類をそれぞれ英文、独文で用意してあった。特に「依頼書」の中味は格調ある可成りの名文であった。この二通を見た時の劇場総務と秘書氏の満足気な表情を今でも思い出す。数分後には彼の部屋に劇場の各分野のスタッフが集められ私はあかも外交官の様な気分を味わったものである。その後私が劇場の中でいかに大事にされたかを記すのは別のチャンスにゆずることにする。ただこの待遇に味をしめた私は、この証明書をプラスチック製の大きな定期券入れのようなのを買い求め、その中に入れあかも通行証のような使い方をしたのである。ドイツの他都市、スイス、オーストリア等のほとんどの劇場でこれらは力を発揮して呉れた。「劇場」という二文字からは自由な雰囲気を感じていたが、実際のそれは、管理機構そのもので、非力な若い日本人が一人対等に振る舞える存在ではない。そんな留学生の私にあの二種類の、四枚の書類は何と大きな力になって呉れたことか。

この制度だったからこそ、「在研」だったからこそ、一年という短期間で、普通の留学生の何倍もの充実した研修が可能だったと思っている。この制度の素晴らしさを後に続く芸術家の一人一人に伝えたいものである。

オペラ演出家  
文化庁芸術家在外研修員の会世話人

編 集 後 記

北海道を除き全国的に入梅し、しばらくはうっとうしい季節が続きます。四月から都道府県のページを設け、各地の文化行政や文化活動をご紹介します。今月は民間の文化活動の紹介の第一弾として企業の文化活動を取り上げました。民間活力の導入と官民協力の重要性に関心が高まっています。今日、企業の文化に取り組む姿勢から、行政として別の角度からの何かが得られればと思っております。今月から「ぶんかブンカ」のコーナーを始めました。「ぶんか」は、日本の文化、「ブンカ」は、諸外国の文化の意味で名付け、誌上国際交流を目指しております。第一回は、文化庁芸術家在外研修員のOBに寄稿をお願いしました。今後、諸外国の文化に接し、文化活動に参加した方々の随想を掲載して行く予定です。新しい企画に対する御意見・御感想をお寄せ下さい。(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課  
TEL(03)三六八二二四(代表)

「文化庁月報」七月号

(通巻第二二六号)  
昭和62年7月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
発行所 株式会社 きょうせい

本社 〒100東京都千代田区丸の内4番12号  
営業所 〒100東京都千代田区西五軒町50番地

電話 (03)二六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 株式会社印刷所

定 価 一八〇円(送料四五円)  
年間購読料 二一六〇円(送料共)